

都筑にゆかりのある人物

(注) 幕末から昭和初期の人物を紹介しました。

岩澤正作 (1876~1944) Fコース 地図(P.18)参照



明治9年(1876)都筑郡川和村に生まれた岩澤正作は、明治21年(1888)川和学校(現在の川和小学校)を優秀な成績で卒業した。その後東京に出て大学で博物学を学び、明治28年(1895)に都筑郡都田村佐江戸に設立された豊永小学校に勤務し、大正2年(1913)群馬県の大間々共立普通学校(現在の群馬県立大間々高等学校)に転任した。岩澤正作の研究分野は、自然科学から郷土史、考古学と幅が広く、初めて遺跡と火山灰との関係を明らかにするための古墳調査を行った。昭和9年(1934)に昭和天皇の前で「群馬県の陸産品について」と題して御進講をした。

前田収治 (1867~1962) Fコース 地図(P.18)参照



川和には、赤ひげ先生と呼ばれ神様のように慕われた前田収治という医者がいた。江戸時代末の生まれで、当時の都筑郡の大半を馬に乗って往診していた。金持ちの人からはきちんと薬代をもらい、貧しい人々からは「金はいらないよ。よくなってよかったなあ」といって診察代を貰わなかったり、農作物で薬代にかえたり、温かく人間味にあふれる医者だった。前田収治の家は川和宿にあり、5代続いた医者の家で、広い庭には櫻の大木が茂っていた。

松野重太郎 (1868~1962) Gコース ⑧ヨコハマダケの碑 (P.21)参照



横浜市には、約4,000種の植物が自生しているが、数少ない「横浜」の名がついた植物の一つが「ヨコハマダケ」である。このヨコハマダケは、明治の末に現在の都筑区川和町出身の松野重太郎により、横浜市西区戸部町池の坂で発見された。松野重太郎は、この竹が川岸や橋梁などに自生するメダケと違うことを発見し、当時の東京帝国大学(現 東京大学)の牧野富太郎にみてもらい、新しい植物であることが分かった。ヨコハマダケは川和町駅近くの新しい住宅になっている旧松野家の庭に移植され、かたわらに横浜植物会が建てたヨコハマダケの英語と日本語の学名を刻んだ記念碑がある。また、神奈川県博物調査会委員の仲間と県下の植物を十数年にわたって調査し、松野重太郎が編著代表者となって同会から『神奈川県植物目録』を発行するなど、植物研究に多くの業績を残した。

牧野よし (1843~1930) Hコース ⑦牧野よしが開いた英語塾跡 (P.23)参照



明治30年(1897)、八所谷戸のサイの神様と呼ばれる道祖神の向かいに、牧野よしは英語塾を開いた。英語と和裁を教えた塾には、近郊の女性たちが30人くらい通っていた。牧野よしは、13歳で江戸城の大奥に勤めたが、20歳の頃池辺村の里に戻った。その後推薦されて、アメリカから横浜に来たヘボン式ローマ字の考案者であるヘボン博士という宣教医の家に勤めた。英語教室での通訳や、ヘボン博士の代理で全国をまわって布教活動を手伝ったりするなど、30年近くも助手を務めた。

島村抱月の養父嶋村文耕 (1854~1904) Hコース ⑨阿弥陀堂の嶋村文耕の墓 (P.23)参照



明治6年(1873)に都筑郡内に邏卒(明治初期の警察官)1名が配属され、池辺村の嶋村タツ所有の家屋が詰り所になった。これが都筑警察署の前身である。この頃池辺村に配属されたのが、明治の文学者島村抱月の養父嶋村文耕である。嶋村文耕は明治12年(1879)に嶋村タツと結婚して嶋村家の養子となり、明治15年(1882)に検事補に任命された。その後横浜、広島、三次の裁判所を経て、松江始審裁判所浜田支部勤務となった。この浜田で当時給仕をしていた佐々山瀧太郎(後の島村抱月)と運命的な出逢いをする。嶋村文耕は島村抱月の人並みでない才能を認め、東京で勉強することを勧め、抱月は明治23年に上京した。嶋村文耕は島村抱月に再三、自分の養子になって欲しいと懇請した結果、嶋村滝蔵の二女イチと結婚した。阿弥陀堂の墓地に、島村抱月が嶋村文耕のために建てた墓碑がある。

小川金蔵 (1809~1894) Iコース ⑥佐江戸の寺子屋 (P.25)参照



佐江戸では早くから寺子屋が営まれていたようで、特に小川金蔵は農業のかたわら、国学を志し、和歌を学び、寺子屋を通して子どもたちの教育にあたったという。明治5年(1872)に学制が施行されてからも寺子屋を続け、明治20年(1887)に役場から解散の申し入れがあるまで続けたという。小川金蔵は、江戸時代から明治となって、古い習慣や考え方が改められ、新しい目標を求めて動き出した時代に、佐江戸のために尽くした一人である。

3代中山恒三郎 (1877~1930) IIコース 地図(P.24)参照



川和村の旧家中山家は、酒類問屋や醤油醸造業、呉服雑貨販売、都筑・橋樹両郡の煙草元売捌及び塩専売卸、生糸製造会社等を営む豪商であった。3代中山恒三郎は、ほかに都筑郡郡会議長、神奈川県農工銀行取締役などを歴任した。一方、菊園「松林園」の園主として、中菊の実生から新花の育成に腐心し、数々の新品種を見出し、我が国を代表した中菊培養家として功績をあげた。活動の事例として、子爵曾禰荒助が明治22年(1889)に創立した菊花団体「秋香会」の副会長、中菊審査部長、神奈川県支部会長の要職に就き同会の発展に大きく貢献した。更に同39年には、神奈川県下の養菊家を結集した養菊団体「秋光会」を組織した。同44年には、東京府立園芸学校からの依頼を受け教授として、園芸家育成のため教育界でも尽力した。

佐藤惣之助 (1890~1942) Lコース ①真照寺 (P.31)参照



折本町の真照寺は、詩人佐藤惣之助が度々訪れた寺として知られている。明治23年(1890)生まれの佐藤惣之助は、大正から昭和初期の川崎出身の詩人で、生涯に20数冊の詩集を発表した。惣之助は俳句・歌謡・小説・随筆にも多彩な才能をみせ、「赤城の子守唄」や「人生劇場」「すみだ川」などは、今なお歌われている。また、六甲おろしで知られる阪神タイガースの歌を作詞した。大正9年(1920)から、毎年友人たちと真照寺を訪れた佐藤惣之助は、裏山の竹の子を採って、竹の子ご飯を食べたり、眺めのよい場所でゴザを敷いて文学や芸術について語ったり、村の人々との交流も深かったといわれる。真照寺本堂前には、佐藤惣之助の詩碑がある。
大いなる田舎 光栄の川 自然の祭

石川作菴 (1815~1902) Lコース ①真照寺 (P.31)参照



明治5年(1872)に学制が布かれる以前の都筑郡の教育というと、読み書きが主体であり、農民の子どもたちに、実生活に必要な文字や数字を教えていた。幕末の頃には、この寺子屋教育の他に私人(儒者)が教えた漢学塾・国学塾などの私塾があった。横浜地域には4つの私塾があったが、そのうちのひとつが近思学舎である。近思学舎は石川作菴が嘉永6年(1853)東方村に創設したもので、農村地域に設けられた数少ない私塾の事例である。このように現在の都筑区南部には、既に江戸時代の末期に教育者がいて、学問を教えていたのである。石川作菴の墓碑は折本町の真照寺にある。

クリスチャン・グラン (1845~1926) Lコース 地図(P.30)参照



明治5年(1872)に造船所の技師として来日したデンマーク人のC・グランは、彼の妻であるヨシ・グランが、都筑郡都田村(現在の都筑区池辺町)から嫁いだ関係で、明治20年(1887)頃、富士山がよく見える池辺町に家を建てた。この家は「池辺の異人館」といわれ明治、大正時代に都田村の名物だった。C・グランは大きな風車で汲み上げた水をタンクに入れ、薪の火で温めて台所や洗面所、風呂場に給湯した。C・グランの家にはデンマーク人をはじめ沢山の外国人が訪ねてきたが、目印は丘でぐるぐる回る風車だったということである。



都田小学校(当時)の上に風車が見える

— 参考文献 —

横浜緑区史通史編(緑区役所)、横浜緑区歴史の舞台を歩く(相澤雅雄)、緑区を訊ねて(緑区福祉部市民課)、港北ニュータウン今昔物語(都市公団)、生命の泉(雲井麟静・藤井正)、川崎に佐藤惣之助という人がいた(川崎区役所地域振興課)、横浜の名をもつ「ヨコハマダケ」(こども植物園だより)、—古木をたずねて横浜植物会の前身とその半世紀—(大谷茂)、評伝 島村抱月(岩町功)、川和の赤ひげ医師前田収治について(石井賢次郎)、岩澤正作小伝(岩澤五夫)、激動の時代に生きた女性~牧野よし一家とヘボン博士~(石井賢次郎)、横浜を巡る七つの物語(大西比呂志)、鶴見川沿いの歴史散歩(金子勤)、緑区歴史散歩(金子勤)、横浜の風車とあるデンマーク人(大西比呂志)、都筑区・寺院グリーンマップ(都筑仏教会)、御大典記念 都田村誌(都田村役場)